

物売りの声

寺田寅彦

青空文庫

毎朝床の中でうとうとしながら聞く豆腐屋のラツパの音がこのごろ少し様子が変わったようである。もとは、「ポーピーポー」というふうに、中に一つ長三度くらい高い音をはさんで、それがどうかすると「起きろ、オーキーロー」と聞こえたものであるが、近ごろは単に「ププー、ププー」というふうに、ただひと色の音の系列になってしまった。豆腐屋が変わったのか笛が変わったのかどちらだかわからない。

昔は「トーフイ」と呼び歩いた、あの呼び声がいっただいづごろから聞かれなくなったかどうかとも思い出せない。すべての「ほろび行くもの」と同じように、いつなくなったともわからないようにいつのまにかなくなり忘れられ、そうして、なくなり忘れられたことを思い出す人さえも少なくなりなくなつて行くのであらう。

納豆屋の「ナツトナツトー、ナツト、なないろとうがらし七色唐辛子」という声もこの界隈かいわいでは近ごろさっぱり聞かれなくなった。そのかわりに台所へのそのそ黙つてはいって来て全く散文的に売りつけることになったようである。

「豆やふきまめー」も振鈴の音ばかりになった。このごろはその鈴の音もめつたに聞かれないようである。ひところはやった玄米パン売りの、メガフォーンを通して妙にぼやけた、

聞くだけで咽喉のどの詰まるような、食欲を吹き飛ばすようなあのバナールな呼び声も、これは幸いにさっぱり聞かなくなってしまった。

つい二三年前までは毎年初夏になるとあの感傷的な苗売りの声を聞いたような気がする。「ナスービノーナエヤーア、キュウリノーナエヤ、トオーガン、トオーナス、トオーモローコシノーナエ」という、長くゆるやかに引き延ばしたアダジオの節回しを聞いていると、眠いようなうら悲しいようなやるせないような、しかしまた日本の初夏の自然に特有なあらゆる美しさの夢の世界を眼前に浮かばせるような気のものであった。

これで対照されていいと思うものは冬の霜夜の辻つじうら占売りの声であった。明治三十五年ごろ病気になった妻を国へ帰してひとりで本郷ほんごう五丁目の下宿の二階に暮らしていたころ、ほとんど毎夜のように窓の下通路を通る「花のたより、恋のつじーうら」という妙に澄み切った美しく物さびしい呼び声を聞いた。その声が寒い星空に突き抜けるような気がした。声の主は年の行かない女の子らしかった。その通る時刻と前後して隣の下宿の門の開く鈴音がして、やがて窓の下から自分を呼びかける同郷の悪友TとMの声がしたものである。悪友と言ってもやぶそば戴蕎麦へ誘うだけの悪友であった。「あいつ、このごろ弱っているから引っぱり出して元氣をつけてやれ」と言つて引っぱり出してくれる悪友であったので

ある。

「あんま上^{かみしも}下二百文」という呼び声も古い昔になかったらしいが、あのキリギリスの声のようにしやがれた笛の音だけは今でもおりおりは聞かれる。洋服に靴^{くつ}をはいた姿で、昔ながらの笛を吹いて近所の路地を流して通るのに出会ったのは、つい数日前のことであつた。

盛夏の朝早く「ええ朝顔やあさがお」と呼び歩くのは去年も聞いた。買ってくれそうな家の付近では繰り返し往復して、それでも買わないとあきらめて行ってしまったのは昔のこと、今ではやはり裏木戸から台所へはいつて来て、主人や主婦を呼び出すのが多いようである。

「ええ鯉^{こい}や鯉」というのも数年以来聞かないようである。「ええ竿^{さお}竹や竿竹」というのをひと月ほど前に聞いたのは珍しかった。

こういうふうに、旋律的な物売りの呼び声が次第になくなり、その呼び声の呼び起こす旧日本の夢幻的な情調もだんだんに消えうせて行くのは日本全国共通の現象らしい。

郷里で昔聞き慣れた物売りの声も今ではもう大概なくなつたらしいが、考えてみるとずいぶんいろいろのものがあつた。その中には子供の時分の親しい思い出に密接に結びつい

て忘られないものもかなり多数にある。

夏になると徳島とくしまからやつて来た千金丹せんきんたん売りの呼び声もその一つである。渡り鳥のよ
うに四国の脊梁せきりようさんみやく山脈を越えて南海の町々村々をおとずれて来る一隊の青年行商人は、
みんな白がすりの着物の尻しりを端折った脚絆草鞋きやはんわらじばきのかいがいしい姿をしていた。明治
初期を代表するような白シャツを着込んで、頭髮は多くは黙阿弥もくあみ式にきれいに分けて帽子
はかぶらず、そのかわりに白張りの蝙蝠傘こうもりがさをさしていた。その傘に大きく、たしか赤字
で千金丹と書いてあったような気がする。小さな、今で言えばスーツケースのような格好
をした黒塗りの革鞆かわかばんに、これも赤く大きく千金丹と書いたのをさげていたと思う。せ
んだんの花のこぼれる南国の真夏の炎天の下を、こうした、当時の人の目にはスマートな
姿でゆつくり練り歩きながら、声をテノルに張り上げて歌う文句はおおよそ次のようなも
のであった、「エーエ、ホンケーワーア、サンシユーノーオー、コトヒーラーアヨ。（休
ム。マツシーマーア、カデンーノーオー、センキーンンタン）」というふうになく同じ四
拍子アンダンテの旋律を繰り返しながら、だんだんに薬の効能書きを歌って行くのである。
「そのまた薬の効能は、疝氣せんきせ 疝癰せんしやく 胸痞むねつかえ」までは覚えていたがその先は忘れてしま
った。

子供らはこの薬売りの人間を「ホンケ」と呼んでいた。「ホンケが来たホンケが来た」と言つて駆け出して行つては、この「ホンケ」を取り巻いて、そうして口々に「ホンケ、オーセ、オーセ」と言つてねだった。「オーセ」は「ちようだい」という意味であるが、ここの「ホンケ」はこの薬売り自身をさすのではなくて、薬売りの配つて歩く広告のビラ紙のことである。この人間の「本家」がまき歩くビラの「ホンケ」は、鼻紙を八つ切りにしたのに粗末な木版で赤く印刷したものであつたが、その木版の絵がやはり蝙蝠傘こうもりがさをさして尻端折しりはしおつた薬売りの「ホンケ」の姿を写したものであつた。いっしょに印刷してあつた文字などは思い出せない。子供らにとつてはこのビラ紙も「ホンケ」であり、それを与える人間も「ホンケ」であつたわけである。とにかく、このビラ紙をもらうのが当時のわれわれ子供には相当な喜びであつた。今になつて考えると実に不思議である。少年雑誌やおとぎ話の本などというもののまだ一つもなかった時代では、こんな粗末な刷り物でも子供には珍しかつたのであろう。ずいぶん俗悪な木版刷りではあつたが、しかし現代の子供の絵本のあくどい色刷りなどに比較して考えるとむしろ一種稚拙にひなびた風趣のあるものであつたようにも思われる。

同じく昔の郷里の夏の情趣と結びついている思い出の売り声の中でも枇杷葉湯びわようとう売りのそ

れなどは、今ではもう忘れている人よりも知らぬ人が多いであろう。朱漆で塗った地に黒漆でからすの絵を描いたその下にからすまる鳥丸 枇杷葉湯と書いた一対の細長い箱を振り分けに肩にかついで「ホンケー、カラスマル、ビワヨーオートー」と終わりの「ヨーオートー」を長く清らかに引いて、呼び歩いていたようにも思うし、また木陰などに荷をおろして往来の人に呼びかけていたようにも思う。その声が妙に涼しいようでもあり、また暑いようでもあった。しかしその枇杷葉湯がいつたいどんなものだか、味わったことはもちろん見たこともなかった。そのころもうすでにポピュラリティ大衆性を失ってしまつて、ただわずかに過去の情性のなごりをとどめていたのではないかと思われる。東京で震災前まではふかがわ深川へんで見かけたことのあるあの定齋屋じよさいやと同じようなものであったらしいが、しかし枇杷葉湯のあの朱塗りの荷箱とすがすがしい呼び声とは、あのガッチンガッチンの定齋屋よりもはるかに多くの過去の夢と市井の詩とを包有していたような気がする。

生菓子をいろいろ、四角でへんぺい扁平な漆塗りの箱に入れたのを肩にかけて、「カエチヨウ、カエチヨウ」と呼び歩くのは、多くは男の子で、そうして大概きまつて尻しりの切れた冷飯ひやめし草履ぞうりをはいていたような気がする。それが持つて来る菓子の中に「イガモチ」というのがあった。道明寺どうみょうじの餡入り餅あんいもちであつたがその外側に糯米もちこめのふかした粒がぽつぽつと並

べて植え付けてあつた。ちょうど栗くりのいがのようだと云うので「いが餅」と名づけたものらしい。「カエチヨウ」の意味は自分にはわからない。このはかない行商の一人に頭蓋ずがいこ骨の異常に大きな福助のような子がいた。だれかが試みに一錢銅貨と天保錢てんぽうせんを出して、どちらでもいいほうを取れと言つたらはつきりと天保錢を選んだといううわさがあつた。また、その生きている頭蓋骨をとづくにどこかの病院に百円とかで売つてあるのだという話もあつた。

七味唐辛子しちみつうがらしを売り歩く男で、頭には高くとがつた円錐形えんすいけいの帽子をかぶり、身にはまっかな唐人服をまとい、そうしてほとんど等身大の唐辛子の形をした張り抜きをひもで肩につるして小わきにかかえ、そうして「トーン、トーン、トンガラシノコー（休）、ヒリヒリカライノガ、サンシヨノコー（休）、ゴマノコケシノコ、シヨウガノコー（休）、トーントーントンガラシノコ」と四拍子の簡単な旋律を少しばやけた中空なバリトンで歌い歩くのがいた。その大きなまっかな張り抜きの唐辛子とうがらしの横腹のふたをあけると中に七味唐辛子ちみの倉庫があつたのである。この異風な物売りはあるいは明治以後の産物であつたかもしれない。

「お銀ぎんが作つた大ももは」と呼び歩く楊梅やまもも売りのことは、前に書いたことがあるから略

する。

しじみ売りは「スズメガイホー」と呼び歩いた。牡蠣^{かき}売りは昔は「カキヤゴー」と言つたものらしい、というのは自分らの子供時代におとなからしばしば聞かされたたぬきの怪談のさまざまの中に、この動物が夜中に牡蠣売りに化けて「カキヤゴーカキヤゴー」と呼び歩くというのがあつて、われわれはよく夜道を歩きながらそのたぬきのまねをするつもりで「カキヤゴー」「カキヤゴー」と叫び歩き、そうして自分で自分の声におびえることによつて不思議な神秘の感覚を味わい享樂したものであつた。

北の山奥から時々姿を現わして奇妙な物を売りありく老人がいた。少しびつこで恐ろしく背の高いやせこけた老翁であつたが、破れ手ぬぐいで頬^{ほお}かぶりをした下からうすぎたない白髪がはみ出していたようである。着物は完全な檻^{ぼろ}褌でそれに荒^{あら}縄の帯を締めていたような気がする。大きい炭取りくらいの大きさの竹かごを棒切れの先に引っかけたのを肩にかついで、跛^{びつこ}を引き歩きながら「丸葉^{まるば}柳^{やなぎ}は、山オコゼは」と、少し舌のもつれるような低音で尻^{バス}下^{しりさ}がりのアクセントで呼びありくのであつた。舌がもつれるので「山オコゼは」が「ヤバオゴゼバ」とも聞こえるような気がした。とにかく、この山男の周辺にはなんとなく一種神秘の雰^{ふん}囲^い気が揺^{よう}曳^{えい}しているように思われて、当時の悪太郎どもも容易には接

近し得なかつたようである。自分もこの老いさらばえた山人に何とはなしに畏怖いふの念をいだいていたが、しかしその「山オコゼ」というのがどんなものだか知りたいという強い好奇心を長い間もちつづけていた。それでとうとう母にねだつて二つ三つの標本を買つてもらつた。それは、煙管貝きせるがいのような格好で全体灰色をした一種の巻き貝であつて、長さはせいぜい五六分ぶぐらいであつたかと思う。もちろん貝がらだけでなく生きた貝で、箱の中へ草といつしよに入れてやるとその草の葉末を養みのむし虫かなんぞのようにのろのろはい歩いた。海でなくて奥山にこんな貝がいるというのがいかにも不思議に思われたが、その貝の棲息状態せいそくじやうたいなどについてはだれも話してくれる人はなかつた。海の「オコゼ」は魚であるのになぜ山の「オコゼ」が貝であるかも不可解であつた。

「山オコゼ」がどうして売り物になるか、またそれを買つた人がどういう目的にそれを使用するか、という疑問に対して聞き得たことを今ではぼんやりしか覚えていない。なんでも今日のいわゆる「マスコット」の役目をつとめるというのであつたようである。たとえばこれを懐中しているとトランプでもその他の賭博とばくでも必勝を期することができるといふのであつたらしい。もちろんこの効験は偶然の方則に支配されるのである。

「丸葉柳まるばやなぎ」のほうはどんな物だか、何に使うのか、それについては自分の記憶も知識も

全然空白である。

売り声の減びて行くのは何ゆえであるか、その理由は自分にはまだよくわからないが、しかし、減びて行くのは確かな事実らしい。

普通教育を受けた人間には、もはやまっ昼間町中を大きな声を立てて歩くのが気恥ずかしくてできなくなるのか、売り声で自分の存在を知らせるだけで、おとなしく買い手の来るのを受動的に待っているだけでは商売にならない世の中になったのか、あるいはまた行商ということ自身がもう今の時代にふさわしくない経済機関になって来たのか、あるいはそれらの理由が共同作用をしているのか、これはそう簡単な問題ではなさそうである。それはいずれにしても、今のうちにこれらの減び行く物売りの声を音譜にとるなり蓄音機こうずかのレコードにとるなりなんらかの方法で記録し保存しておいて百年後の民俗学者や好事家に聞かせてやるのは、天然物や史跡などの保存と同様にかなり有意義な仕事ではないかという気がする。国粹保存の気運の向いて来たらしい今の機会に、内務省だか文部省だか、どこか適当な政府の機関でそういうアルキーヴスを作ってはどうかであろうか。ついそんな空想も思い浮かべられるのである。

（昭和十年五月、文学）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第五卷」岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年11月20日第1刷発行

1963（昭和38）年6月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第65刷発行

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を讀者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

物売りの声

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>